[同時再生：鳴かぬ蛍は灯と灯を結び、鐘の音の雫に身を焦がす。]

　難儀なものだな、と思う。
　生きていた頃よりもずっと、見えることも考えられることも増えた。とはいえ、賢くなれたわけではないが。
　見える彼女は、「自分には見えるのだからこの存在は自分にとってだけは変わらない」のだと言っていた。その「自分にとってだけは」という意味を、理解出来ていなかったのだと気付かされた。

　難儀なものだな、と思う。

　割り切らない彼女が、愛しい。
　プロポーズ紛いのことを言われてまで、うだうだと――結局は自分も意識下で考えていたのだ――渦中に潜んでいる必要は無いのだろう。
　大事な彼女が、大事な妹と、秘密を共有し合って笑い合えたその時が来たら。

　彼女達に降らせるのは、想いを映した赤い花。

＊＊＊
＊
(1,143+1,102+333＝2,578 文字)